

7月5日「遠くに離れたあなたに！」ヨハネ福音書4：27～42

「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」サマリア人の女性は町の真ん中に行って声を張り上げました！町の人々は驚きました。だって、ついさっきまで人目を忍んで生きていた女性だったからです。

今日の物語は先週の続きです。井戸端でイエス様と出会ったサマリア人の女性はイエス様との対話を通して変えられていきます。彼女はどうかやらかケアリ（過去に5人の夫が居て今は別の男性と暮らしている）で本来早朝に行く水くみの仕事を人目を避けて、正午に誰も居なくなってから汲みに来ていました。そのことをイエス様に言い当てられた女性は、イエス様が長年待ち望んだ救い主だったことに気付きます。そして、彼女は大勢の人たちにイエス様を伝える者となっていきました。「あの女性がこんなに変わるなんてただ事ではない」そう思った街の人たちはイエス様を尋ねてやってきました。町の人たちはイエス様の語られる神の国の話に感銘を受けます。「しばらくこの街に留まってほしい」人々の願いを聞き入れイエス様は2日間もサマリア人の町に滞在されました。それは互いに憎しみ合っていた二つの民族の間ではありえないことでした。イエス様から直接話を聞いたサマリア人たちはイエス様のことを救い主だと信じるようになりました。

今日の物語を聴きながら思い出した出来事がありました。私が以前勤めていた神戸の教会では毎年2回ほど青年礼拝を行っていました。礼拝説教を神学生や伝道師が担当して、奏楽、司式、献金当番などすべて青年たちで担当するのです。ある年の私が説教を担当した青年礼拝で、出席者の高齢女性が礼拝後に感激の涙を流しておられるのが目に入りました。「そんなに良い説教だったかな（照れ）」と思っていたら、涙交じりの声が聞こえてきました。「～ちゃん、本当に立派になって・・・」ズッコケそうになりましたが（笑）、よくよく話を聞くと合点がいました。その日、私と一緒に司式をしてくれた青年は教会の中では「超」が付く悪ガキで、しょっちゅう教会は破壊する、上ってはならないところから飛び降りる、礼拝が嫌いでお話の途中で飛び出してしまう etc 「この子に教会は向いていない」

と思われていた子だったのだそうです。そんな彼が成長する過程で色々あって、教会に戻ってきて、洗礼を受け、今では立派に司式をしてくれるまでになった、子どもの教会のスタッフだった高齢女性には嬉しくてたまらない出来事だったのだそうです。

イエス様の福音というのは本当に不思議で「遠く」にいる人から伝えられていきます。今日の物語でもユダヤ人より先にサマリア人へと伝えられ、さらに男性や地位の高い人ではなく社会の中で人目を忍んで生きざるを得なかった女性へと1番に伝えられていきます。それは聖書の一貫したメッセージでもあります。イエス・キリストの誕生は誰に最初に伝えられたのでしょうか？名もなき女性マリアに伝えられ、野宿していた羊飼いに伝えられ、外国の博士たちに伝えられます。そして国の中心エルサレムに居た人たち、つまりヘロデ王や学者たちには皮肉なことに伝えられても伝わらなかったのです。福音は遠くにいる者から伝わっていくのです。

さて、今日の物語で女性からイエス様のことを伝えられ、自分たちでイエス様の御言葉を受け取ったサマリアの人々は彼女にこう伝えます。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」もはや女性の証言は必要なくなったと告げるのです。それは民族・国境を自由に超えてもたらされる神さまの救いと恵みの業の前には、一介の伝道者の働きは本当に小さなものでしかないことを伝えています。

今日、もう一か所日課で挙げられていたエフェソの信徒への手紙にはこうあります。「2:14 実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。」エフェソは現代のトルコにある町の名で、古代にはローマのアジア州の中心で、様々な文化や民族が交流する大都市でした。パウロによって宣教されたその町の教会には多様な民族、いろいろな人たちが集まっていたと思います。この手紙の著者はそんな教会に集まる人たちに向かって語り掛けます。キリストの十字架によってユダヤ人と異邦人とを隔てていた「壁」は壊された！両者は和解し、

一つの民、一つの身体、神の家族の一員となったのです。エルサレムから遠く離れた日本で、ユダヤ教・キリスト教の文化圏から全く離れたこの日本で、神さまの恵みを受け取っている私たちは、まさにこの言葉の生き証人であると思います。私たちは神の大いなる恵みによって、神さまの救いの計画に加えられているのです。

けれども、一方で、この「キリストにあって世界中のすべての人々は神の家族である」という確信が、植民地時代以降、多くの宣教師たちを世界へと送り出し、西欧的価値観によって、力をもって支配する形でキリスト教信仰を広めた負の遺産があることを忘れてはなりません。キリスト教をその土地の価値観や慣習よりも勝ったモノととらえ、その土地の信仰と靈性を踏みじって来たのです。私たちの教派メソジストの創始者ジョン・ウェスレーもその「ある種の」上から視線から逃れることは出来ず、アメリカ大陸での現地人への宣教は大失敗に終わったのです。日本で生きる私たちにもこの課題は大きく、例えばお墓のこと、地域的な神事などとの関り、従来の家族観と自身の信仰との間でもがき、悩む声を聴かせて頂くことがあります。

これは本当に大きな課題なので、なかなか簡単に「こうなさい！」と言うことは出来ませんが、一つ私が教えられた言葉をお話しします。「ミッシオデイ」と言います。ラテン語で「神の宣教」という意味です。それは従来の教会が神の祝福と恵みを保持していて、それを知らない人たちに伝えるに出ていくという伝道観ではありません。この世界には神さまの祝福と恵みで満ちている、宣教とは、この世界に神さまの具体的な働きを私たちが捜しに行くことだ、ということなのです。例えば、讃美歌はキリスト教の伝統的にはオルガンで歌われてきましたが、オルガンの中に神の恵みが詰まっていて、それを持ち運びしているわけではありません。神さまの恵みはあらゆるところに溢れています。讃美歌 21 にはオルガンだけではない多様な楽器で奏することが可能な讃美歌がたくさん納められています。

今最もキリスト教が広がっている地域はアフリカです。1900 年頃には 1000 万人ほどだったキリスト者の人口がこの 100 年で 4 億人まで増え、イスラム教と双璧をなしています。長い間、西欧諸国の植民地だったアフリ

カで、キリスト教は自由で民主的な社会を望み、西欧諸国から独立するための精神を支えたのです。そのアフリカの教会で大事にされていることは、自分たちの楽器や歌で賛美すること。そして祈ることです。まったくヨーロッパ的でも教會的でもない打楽器やダンスによる賛美が礼拝では大切にされ、病に対して具体的に治癒の祈りが祈られます。それは野蛮だったり、文化的に劣ったものでは決してなく、アフリカの地で成熟したキリスト教信仰なのです。実は先ほど話した神戸の教会の青年は和楽器が大好きで“篠笛”（牛若丸が吹くやつ？）が得意でした。青年礼拝では篠笛で讃美歌を吹いてくれたことがありましたが、そこには確かにイエス様の福音が息づいていました。

「エフェソ 2:17 キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。」讃美歌との相性などかけ離れていそうな楽器のなかに神さまの素晴らしさは存在するのです。そうやって神さまの働きは本当に不思議で、全く遠くにいる方のところにこそ、実は働いているものです。

イエスは言われます。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。（マルコ 2:17）」そもそもイエスは罪びととして神さまから最も離れた私たちに救うために来られたのです！ですから、私たちはエルサレムからは全く離れた日本でこそ、神さまの働きを探していきたいと願います。神さまは遠く離れた私たちにこそ働きかけ、豊かに聖霊を注いでくださるのです！